



しゅくがわスカウト広報誌

夙川

西宮第3団 団報

NO.1 創刊号

2004年新春

変えることのできるものを変える勇氣
変えることのできないものを受け入れる冷静さ
そして
両者を識別する知恵を求めて・・・

夙川スカウト弥栄

日本ボーイスカウト兵庫連盟西宮第3団は、昭和35年に発団以来、第13団、第23団を分封、それぞれビーバーからローバー隊までを持っていました。自団で育った指導者が支えることで、ボーイ隊は10泊の夏季長期野営を40年以上継続しています。私たちの団は、小学校児童の実に6割が私立中学に進学するという特殊な地域にあります。それでも、これまで小学校男子児童10%程度の隊員を維持し、地域での存在感を保ってきました。

しかし、ここへきて、学力低下の喧伝により塾志向が一層強まり、活動から離れるスカウトが目立ってきたのです。とりわけ、進学熱のあおりをもちに受けるボーイ隊が深刻です。進学準備で欠席するスカウトが後を絶ちません。班員が2～3人になってしまいました。

このままでは、いけない。とにかくB-P卿が提唱したように4ヶ班を構成し班制教育をしなければ、ボーイスカウトでなくなってしまう。そういった危機感がつの中「誰のためのスカウティングか」「何のためのスカウティングか」を考えたとき、大人の勝手に3つの団を維持しようとするのではなく、ボーイを2ヶ隊にし、それぞれ6～8人の3～4ヶ班にすることこそ必要ではないか、という結論に達したのです。統合によって、ビーバー・カブが3ヶ隊、ボーイが2ヶ隊(7ヶ班)、ベンチャー・ローバーが1ヶ隊という変則的な10ヶ隊構成になりました。

ネッカチーフは3団のものに統一。「青年隊」などと書いてある伝統の隊旗は、全部新調しました。指導者の人数は40人を優に超えます。団委員会も、育成区域が3ヶ団分になりましたので、地域(学校)担当が3倍の人数になりました。とにかく大所帯です。子どもが減っても、大人は大所帯です。それをまとめる苦労、さまざまな調整作業、組織を統合することがいかに大変か痛感しましたが、それだけのことをしても、スカウトのために良い環境を整えてやらねばならない。そうしなければ、この運動はすたれらると信じ統合に至ったのです。ボーイ隊の活動を正しく行えば、私たちの運動は認められ、元のようにスカウトが増えると信じています。動き出したばかりで、問題が山積みですが、信ずる道を邁進していきたいと思えます。

新たな活動が始まった

夙川スカウト 団委員長

山田明良

2007年にはスカウト運動開始100周年を迎えます。創始者ベーデン・パウエルが提唱した目的・原理・方法が世界中に広まり、しかも一世紀に亘って続いてきたのです。この目的・原理・方法こそがスカウト運動の根幹であり、どこの国でも受け入れられ続けてきた要素ともいえます。

ところが国により或は時代によってこれらは変るものだという意見が多くなり、スカウティングはいろんな形で変化してきました。しかしながら、目的・原理・スカウト教育法を変えれば変えるほどスカウトに加入する者が減少するという事に約20年程前に各国とも気づき始めました。(日本ではこの5~6年前)そして今世界スカウト機構では2007年に向けて、指導者の確保と研修・スカウト教育法の徹底と青少年プログラムの実践などの戦略を策定し実行しています。その最終達成時が世界ジャンボリーです。

特にスカウト教育法の要素としては、次の7点に絞ってその徹底を図っています。

- 1、 ちかいとおきての実践
- 2、 行うことによって学ぶ
- 3、 小集団による活動(班制教育)
- 4、 自然の中での生活・活動
- 5、 個人の進歩と評価
- 6、 象徴的枠組み(スカウトという名称・制服・記章など)
- 7、 成人の支援・成人と青少年の協力関係

これを受けて夙川スカウトも再度点検し評価いたしました。そしてまず班制教育の見なおしをした結果として、3個団統合という思い切った荒治療を行いました。しかし、これは形を整えたにすぎません。本当の班活動は班員全員が毎回揃って活動すること、民主的に運営され自治が確立していて自律していること、そして何よりも大切なことは班員がそれぞれ班の中での役割を持ちその任務を正確に行うことです。人数が整ったのですから次は本物の班を作って欲しいものです。

また団を統合したことにより成人の支援が組織的になってきました。団委員の皆さんの支援、隊指導者の活躍がより具体的になり且つ目に見えてきました。

私は今日本連盟の指導者養成委員(アダルトリソース委員)を司り、世界スカウト機構の戦略の一つである指導者の確保と研修という課題に取り組んでいます。これらの方策を取り入れ、夙川スカウトの指導者確保・研修も合わせて取組まねばならないと思っています。

夙川地域に居住する総ての青少年にスカウト活動を提供してやりたい、そんな想いで3個団統合が、吉となるようスカウティングにおける成人一同前向きに進みたいものです。

変えないために工夫して変える

夙川スカウト 副団委員長
森地 一夫

「夙川スカウトがひとつになった」というのは、地区や県でも話題になっており、今後の動向が注目されています。これほど大きな変革をあえて断行したのは、ボーイ隊を3~4個班にしたいためであることは、育成会総会でもお話ししましたし、総会資料にも掲載しています。しかし、統合から3ヶ月余りを経て、さまざまな課題が浮き彫りになっていますし、これからは統合当初のモチベーションが下がってくることも予想されます。そこでこの機会に、再度「なぜ変えるのか」を確認しておきたいと思えます。

世間では、何年も前から「子どもが変わった」と言われつづけています。とりわけ、最近では出生率の低下・晩婚化などにより少子化が進み、子どもの変化が社会全体の問題になってきました。文部科学省中央教育審議会が2000年4月に出した答申では、

少子化が教育に及ぼす影響としては、子ども同士の切磋琢磨の機会が減少すること、親の子どもに対する過保護・過干渉を招きやすくなること、子育てについての経験や知恵の伝承・共有が困難になること、学校や地域において一定規模の集団を前提とした教育活動やその他の活動(学校行事や部活動、地域における伝統行事等)が成立しにくくなること、良い意味での競争心が希薄になることなどが考えられる。

とあります(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/000401.htm)。ボーイスカウトの活動が難しくなってくるのは当然です。では、ボーイスカウトも、それに合わせて変わらなければならぬのでしょうか。

子どもが変わってきているのは事実でしょう。とりわけ現場の指導者達は、変化をひしひしと感じています。最近の子どもは、昔に比べて、純朴でなくなったと言われます。無気力な子どもも増えたようです。どのようにしたら子ども達に受け入れてもらえるプログラムになるか、指導者達はいつも悩んでいます。

しかし、本当に変わったのは「子ども達」なのでしょうか。変わったのは、「子ども達」そのものではなくて「子ども達を取り巻く環境」ではないのでしょうか。

子どもは大人のミニチュアではありません。大人のように日常雑多な問題を考えているのではなく、習性として、空想の世界にひたったり、彼らの世界を構築して楽しんだりしています。それを見えなくしたのは、社会環境が変わって、子ども達の世界がこわされる傾向にあるからでしょう。時間がない、場所がない、仲間もいない。もしそうなら、子ども達の世界を守り、広げてやることこそ、子ども達がよい大人に成長していくために必要なことでは無いのでしょうか。子ども達本来の世界は変わっていないし、そのためにボーイスカウトができることも変わっていないと思うのです。

今から100年ほど前、ロンドンの子ども達を見ていたB-Pは、子ども達が大英帝国を支える人材になれるのか危機感を持ち、少年たちの「治療」が必要であると考えました。

以下の表は、当時のB-Pの構想を示したものです。

この表にある「手技」は当時の社会人に要求されるもので、今とぜんぜん違います。現代ではどちらかという知的労働のウエイトが高くなっていますが、当時は文字通り「手技」が要求されました。また、当時のロンドンの衛生状態は相当にひどく、ダウントウンの子ども達は、ネズミをおもちゃにして遊んでいたようですから、「衛生」について特に強調されています。とはいえ、細部はともかく、この表から伝わってくる「社会に求められる人間像」については、今でもほぼそのまま通用するのではないのでしょうか。

(Scouting for Boys 第3部より)

国民的欠陥	原因	根源	予防策	治療策としてのスカウト訓練
無宗教 無規律 愛国心の欠乏 利己主義 背徳 他人無視 残忍	最高良識の欠乏	自律の欠乏	人格教育	次のものを通じての人格形成 良い環境 名誉の観念 義務の観念 自律 責任 創意工夫 手技 自然研究を通じて神を知る 宗教の実践 公正な行動 他人への手助け 国家に対する個人的奉仕
暴力・犯罪 精神錯乱 無貯蓄と貧困	飲酒			
虚飾 浮浪と横着 道義の低下 賭博 不純正 疾病	放縦			
不健康 不潔 嬰兒死亡 精神的欠陥 肉体的欠陥	両親の無知と無責任	衛生学と生理学の知識不足	肉体的健康教育	次のものを通じての健康 野外運動(ドリルだけでなく)自分の身体の発育を基準にまで高める責任 健康及び衛生の実践

B-Pは、スカウティング・フォア・ボーイズの中で、当時としては独創的な方法(システム)を提唱しました。他の団体は軍事的教練(ドリル)を主体にしていたのですが、B-Pは、子ども達の世界での遊びを通じて「治療」を行おうとしたのです。

子ども達の世界を活かしたシステムが「班」というグループワークによる「班制教育」です。「班」での活動を通じて、人格形成がなされます。そして野外でいろいろな「手技」を得られる遊びをすることにより、公民性を養おうとしました。それが、ボーイスカウトです。

B-Pは、創意工夫の達人でした。子ども達が楽しめそうな素材をプログラムにどんどん採用しました。キャンプもハイキングも今では当たり前のものですが、一般人がだれでもするようになったのは

B-P が子ども達に提供したのが始まりです。B-P はよく「分からないことは子ども達に訊け」と言っていたそうですが、それは、B-P が常に子ども達の世界に視点を置き、その世界をさらに膨らませる工夫をしたことから出た言葉だと思います。

組織的な変革も行われました。ボーイスカウトの目的も、始めは「大英帝国のため」だったのが、ある時期から「世界の子ども達のため」という風に路線変更になりました。もっとも、そうできたのは、ボーイスカウトの方法論が国を問わず受け入れられる普遍的なものだったからですが…。

でも、B-P は、班制教育を始め独自の方法の根本は変えませんでした。それは、文化の違い、社会の変化により子ども達の置かれる環境が変わっても変わらない、子ども達の世界を確実に捉えていたからです。B-P の変革は、どうすればもっと子ども達を楽しませ、より良い大人を作ることができるが工夫しつづけたことに他なりません。ボーイスカウトとして変えてはならない班制教育や野外活動をいかにうまく実施できるかのために工夫し、変えるべきところは変えていったのです。

私達の統合のねらいも同じです。私達の団がボーイスカウトであるためには変えてはならない班制教育ができるよう、工夫して、ボーイ隊が3～4個班になるよう2個隊にしたのです。この状態を維持・発展させるには、これからもさらに工夫が必要です。皆さん、大いに工夫をしましょう。もっともっと子ども達がボーイスカウトを楽しんでもらえるように、皆さんの叡智を結集していきたいと思います。

兵庫連盟の「スカウト兵庫」は下記アドレスより

http://www.bs-hyogo.gr.jp/schyogo/scout_schyogo.htm

[2003年10月15日号 No.228](#) に表紙に使用しました文章が掲載されています。

ボーイ1隊



ボーイ2隊



新しい隊旗のもとで行われた入隊式

「あれから30年」

ボーイ隊 1隊隊長 高田 真志

5歳年上の兄貴の制服姿がかっこよくて、幼稚園の頃から兄貴の後ろに引っ付いてはカブスカウトの集会や舎営に、、、「付いて来んな!」「、、T_T、、」

1973年9月北山三ツ池、故永井隊長の前で入隊式。野球帽の少年からカブスカウトの制服に袖をとおして、そうあれから30年。人生38年でスカウト歴30年??納得できるような出来ないような、でも今も元気にスカウティングに励んでいます。

今振り返ると色々な事が思い起こされ、何度となく挫折しそうになりながら30年という月日を過ごして来たような気がします。兄への憧れ、強く厳しい母、ライバルの存在、可愛い後輩と何故か憎めない先輩、そして愛すべきスカウト達、そんな多くの存在が私の支えと成り”継続”という大きな力と成りました。どんなに辛くても、どんなにしんどくても私は一人ではなかった、だから今の私があります。

私の母は本当に厳しかった。特に躰、たとえ他人の子であろうと礼儀のわきまえない子供は真剣に叱りつける。「おまえのおかん恐いな～」と、よく友だちに言われたものです。母はじっとしていられない性格で、私の小さい頃から会社を始め、毎日仕事と家庭で忙しく走り回っていました。ある年の夏、いきなり母がレックにやって来て「仕事で近く迄来たから差し入れしに来た!」と社員数名と段ボールを数個抱えてやっ来ました。未だに疑問ですがあんな所に仕事???それを見ていたある先輩スカウトが小声で「過保護や～」と、すると間髪入れずに「過保護違うよ!!」とその先輩スカウトを一喝。そんな母のパワーに後押しされていたのがカブ時代。昨年 LEC30周年を迎えスカウトクラブで池原に行った時、久しぶりだろうと思い母を誘って一緒に参加しました。小倉さん一家も覚えていてくれて楽しい一時を過ごしましたが、相変わらず喋り出すと止まらず、犠牲になったローバーの皆さんお疲れ様でした。

つい先日、18年ぶりにボーイ隊時代の同期のスカウトと再開しました。彼とは初級から隼スカウトまで同時進級、そして常に優秀班を競い合うライバルでした。伝統あるハヤブサ班班長、彼は今、イギリスのロンドンでシティーグループの金融マンとして活躍しています。私がボーイ隊の時は1年上の先輩がおらず3年目から班長に、最終学年にはどの班も7～8名の班編成で活気ある活動をしていました。3年目は先のハヤブサ班に春・夏とも優秀班を取られましたが4年目は私の班、ヤギユ - 班が春・夏優秀班を取ました。それもこれもハヤブサ班に負けたくない一心で頑張った結果です。ボーイスカウト活動を続けているのは私だけになりましたが今でも当時の班長連中とは連絡を取り合ってます。

高校生になり私は日本の古武道「弓道」と出会います。当然ボーイ活動との両立は大変苦労しました。当時シニア - 隊(現ベンチャー)は年3回の遠征に加えスキー、小屋掛け、サバイバル、サイクリング等の活動をしており、常にクラブの監督に雷を落とされながら上手くスケジュールを調整しながら、両方参加できるよう努力していた事を覚えています。15歳で出会った弓道は大学、社会人そして現在でも継続しています(今は、ボーイ活動が忙しく練習をさぼり気味ですが、、、)。私の結婚式で当時の監督が始めて私のボーイスカウト活動を認めてくれました。当時よく「ボーイなんか辞めてまえ～」と

怒鳴り散らしていた事を反省されスピーチで謝っておられました。時間は掛かったけど途中で止めずに両方継続していて本当に良かったと思った瞬間です。

大学でも時間的な苦勞は続きます。思えば高校生時代、夏休み1日全く何も無い日は1~2日程度、大学時代も2ヶ月ある夏休みで自由な時間は1週間も無い状態でした。忙しくて忙しくて、でも自分が決めた事ですから今にして思えばとても充実した日々を過ごせたと満足しています。社会人になって仕事の都合で何年か活動を離れた時期がありますが、振り返れば30年経っていました。

いろんな人に助けられ、多くの人に見守られ、ボーイスカウトと弓道を通じて私は多くの力を備えられたと思います。現代はインターネットや携帯電話の普及で非常にスピードを要求される時代になっています。ただ人間本来の力はそんなに簡単に身に付く物ではありません。自分を見失わず自分のペースで少しずつ力を付けていけば良いのだと私は思います。

スカウトの皆には聞いてほしい、しんどいから、辛いかとって逃げてはダメ、自分から厳しい所へ身を投じるくらいの気持ちを持ってください。美味しいものを見て一口かじっては次の物へ、また一口かじっては次の物へ、そのような事は絶対してはならない。一度始めた物、事は最後まで続ける、「継続」は人の血となり肉となり必ずいつの日か大きな力となります。「有言実行」でもひとりぼっちではありません。多くの仲間がいつも君達のそばにいます。

あれから30年、仲間と共に歩んだ30年でした。

新しいスタート

ボーイ隊 2隊隊長 ことじ 泰明

今年度から夙川スカウトが一つの団としてスタートしたわけですが、統合に関して様々な意見が出ていました。私の中でも当初、統合した方がよいのか、このままの体制を維持しながら別の改革を考えるべきなのかわからなかった。このままの状態がよいとも思っていなかった。ボーイ隊の人数が減り、班が減り、満足のいく活動が出来ない状態をほったらかしにしてはどんどん悪い方向へいってしまい、ボーイスカウトの本来の目的が果たせなくなるので、統合して、立て直すというのは十分理解できる一方、自分の出身の団がなくなることや、3・13・23団の各団がこれまでに築いてきた伝統、歴史、カラーがあり、それぞれ誇りを持っていたものがなくなるのが残念でした。しかし、伝統を守ろうとする大人たちのこだわりよりも今の子どもたちの活動を一番に考えるということが大切であることを再認識しました。統合をきっかけに夙川スカウトがどんどん発展していき、夙川スカウトの誇りを大切にしていきたいと思います。

また、今年度は統合という大きな変化に加え、私自身もボーイ隊長をすることになりました。新しいスタートの今年度に隊長という大役をするのはプレッシャーがかかるけれど...やるからにはやるっきゃない！我々指導者が子どもの頃に感じた充実感、満足感を今の子どもたちが感じる一年にしていき、統合元年を成功させたいです。

ベンチャー活動について

ベンチャー隊 隊長 松井 俊哉

みなさんご存じのようにボーイスカウトはビ - バーからローバーまで5つの部門に分かれ、その中で16歳から18歳までの期間活動するベンチャー隊は、今まで培っていたボーイでの技能を基に、自ら考えプログラムを作り、挑戦していくことを中心に活動しています。

この活動をプロジェクトといい、企画・計画・実施展開・評価反省までの一連の作業を自らの責任を負う事ができる様に目指しています。ただプロジェクトの内容は様々で彼らが挑戦したいスポーツや研究したい題材まで、興味のある物をニーズとして、企画しています。また団内では兄貴分として隊付きとしても活躍しています。



ソロキャンプ

ベンチャー隊 邑智功大

このキャンプは、いつものボーイのころのキャンプと違って何か違う感じがした。キャンプだと、仲間と協力して笑い合えるけど、一人だと少し静かだった。その日はちょうど日本シリーズの開幕戦で、ラーメンをすすりながら、いつも初日の出を見る所でラジオを聞いていた。山で野球観戦するなんて思ってもいなかった。

ベンチャーではコンロを使って飯を作った。ボーイと比べてすごく楽になった。そう思えるということは、四年間ボーイでしてきたことがしっかり身についていたことだと思う？本当にベンチャーに上がっておもしろいこともあるし、隊付とかにも行けて将来人を引っ張っていくにあたって必要なことが学べる『場』なので、ぜひ悩まずにベンチャースカウトに上進してきてください。

{ ソロキャンプとは・・・ベンチャー隊進級後、ベンチャー章取得のために与えられる課題で、
自ら計画した一泊単独キャンプである。 }

ケーピング

ベンチャー隊 大垣孝介

2003年11月23日・24日

毎年進入歓迎という意味をこめて行われる秋季のプロジェクトですが、去年のサイクリング・釣りに続き今年は、岡山県の新見市まで洞窟探検へといってきました。

岡山県のこの地方は数多くの洞窟があるとして、洞窟探検を行う上ではとても最適な場所でした。

当初、岡山県新見市へは長距離バスでゆ〜っくり揺られながら行く予定でした。しかし、当日に



なってバスは満員。急遽JRでの旅へと変わったのです。そのおかげで時間、お金ともに計画はぼろぼろ。1時間に1本程度のローカル線に乗り、途中下車して食料を調達、そうかと思うと駅で1時間もトランプをしてバスを待つ。予算は計算に計算を重ねた結果、予備としてあった10000円を入れてぎりぎり足りるなど、とても波乱続きの旅でした。

肝心の洞窟はというと、真っ暗な暗闇、鍾乳や、大量のこうもりなど普段見ることのできないものがたくさんあり、とても楽しかったです。キャンプは洞窟を御神体とするお寺の近くに泊まり、夜にはみんなでちげ鍋をすすり、とてもきれいな星空の下楽しく過ごしました。とても、ボーイスカウトのキャンプとは思えないほど無計画な旅でしたが、予備費の必要性や、もしものときのルートも考えておく必要性など、学ぶことが多かったです。年の初めのプロジェクトでこのような経験をすることができたことは、今年一年の活動に大きな影響を与えるのではないかと思います。

スキースノーボー

2003年12月26日~31日

去年の冬のプロジェクトに続き今年も、長野県の白馬までスキー・スノーボーへと行ってきました。

去年は世界ジャンボリーのことなどもあり少なかった参加者も、今年は7人集まり、行く前から皆とても楽しみでした。スキースノーボーはもちろん、

ボーイのころでは見ることも想像さえもできなかった、雪に埋もれたLECに泊まることができ、常に興奮状態のプロジェクトでした。登山に行くよ

うなバックザックに荷物を詰め、きれいなホテル

に食事とお風呂だけ入らせてもらい、毎日バスのような超ローカル電車に乗ってLECへと帰るの

でした。LECでは皆で囲炉裏を囲んでおもちを焼きながら遊び、夏では重い荷物を運びながら上る坂にコースを作ってそりですべるなど、都会では経験できないような体験をしてきました。



廃品回収にご協力を・・・

団運営において貴重な収益となりますのでご協力よろしくお願いたします。

回収場所時間などは下記をご覧ください。個人のお宅にご協力を頂いておりますので、くれぐれもご迷惑にならないようにお願いします。

C S 1 隊 B S 1 隊 会計
大久保様宅・澤田様宅

・・・第二土曜日・・・当日 a m 9 : 30 までに届ける

間・雑誌 (コミックは不可)・ダンボール・古布・アルミ缶

雨天でも業者が回収に来ますが、濡れたものは不可です

C S 3 隊 B S 1 隊
磯野様宅・高丸様宅

・・・第二日曜日・・・当日 a m 8 : 30 までに届ける

新聞・雑誌 (コミックは不可) カタログは高値

ダンボール・古布・

B S 2 隊
松久様宅

・・・第二日曜日・・・当日 a m 9 ; 00 までに届ける

上記に同じ

スカウトクラブ
余部徹様宅

スカウトクラブ
山下晃治様宅

・・・第二日曜日・・・当日 a m 9 ; 00 までに届ける

上記に同じ



結
団
式

編集後記

新しく夙川スカウト三団が結成されてから、早半年がたとうとしています。兄弟団とはいえども、それぞれの団がオリジナルのカラーを出しながら活動してきたわけですから、いろいろな面での不安もおありでしたでしょうが、今のところは順調に滑り出しているようです。団委員会も、やはりそれぞれのカラーの中で営まれていましたが、保護者の代表としての新団委員の方々は、大所帯になった夙川スカウト活動を支える源として積極的な協力体制で臨まれており、活気あふれています。このたび団委員会広報は、広報誌「夙川」を発刊することになりました。

ボーイスカウト活動を選んでわが子を入団させた以上、保護者としてもスカウト活動をきちんと認識して関わっていけるように、そのための啓蒙活動の一環としての広報誌として、年に数回発刊をしてゆく予定です。

今回は、記念すべき第一号として、団委員長・副団委員長・そして、改革の渦の中にいるボーイ隊の隊長から原稿を頂戴いたしました。また親の手を離れて活動するがために、なかなか彼らの活動を知る機会がないベンチャー隊（中学三年～高校二年）の充実した活動を少し報告させていただきました。今のベンチャー隊には、ビーバースカウトから活動し続けているスカウトもいます。退団者が増える中、彼らの成長ぶりをうれしく思います。

今後は皆様に原稿をお願いすることもあります。どうぞご協力のほどよろしくお願いいたします。

K・O

活動の写真・広報誌などホームページでご覧になれます。

<http://pub.shukugawa-scout.net/>

広報誌に関するご意見ご要望などは下記メールへお願いします。

koho@shukugawa-scout.net



発行
ボーイスカウト兵庫連盟西宮第3団
団委員長 山田明良
広報担当 大垣昭博 ・ 大垣恵子